

重点取組分野	令和 7 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
自発的・主体的に行動できる力	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、知識の定着を目指す授業展開を行う。同時に、獲得した知識や技能を次の活動につなげていく年間計画を立てる。②昨年度の重点研究で「自発的・主体的に行動できる子どもの育成」を掲げて取り組んだ。子どもたちの得た経験をさらに生かすために、子どもたちの興味・関心をより高め、授業に意欲的に取り組めるようにする。	①放課後の時間の捻出により、学年研等でじっくりと授業の話ができていく。子どもたちのもっている知識や技能をより一層生かせる場を設けることが課題である。②重点研究で総合的な学習を引き続き扱い、子どもたちが自ら課題を設定して、壁を超えていく場面を設けた。積み重ねていくことで、確実に学習の主体性は高まっている。	B
豊かな心	①互いに認め合える温かい学級風土づくりを目指し、YPアセスメントや横浜プログラムの活用を図る。②命の大切さになれる学習を充実させることで、自分や周りの人を大切にしようとする気持ちを育む。③進んであいさつをすることや互いに認め合える関係づくりの取組を子ども主体で計画する。	①年2回のYPアセスメントと実態に合わせた横浜プログラムを実施することで、温かい学級風土づくりを目指した。②外部講師による命の授業を実施し、今を精一杯楽しむことが命を輝かせることにつながると教えていただいた。③人権週間の取組として「ありがとうの木」の作成を行うことで、互いのよさを目をつけるきっかけになった。教職員が進んであいさつをする地道な取組を続けることで、児童の変容を期待したい。	B
健やかな体	①体育の授業や運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して様々な運動に親しむ環境を整え、子どもが主体的に体力向上を図れるようにする。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いをなく食べることの習慣を身に付けたり、子どもが食の大切さ考えるための取組をしたりしながら実施する。③子どもがデータから自分や学校の状況を理解することで、主体的に健康な生活を実践できるようにする。	①児童の実態に合わせて体育学習を工夫していくことで、子どもたちが進んで楽しく体力が高められるようにした。運動委員会では、シャトルランやドッジボールを通して、楽しみながら運動の良さに触れられるような活動を展開した。②食育に関する諸活動を通して、子どもたちが楽しみながら、進んで給食が食べられるような工夫をした。③保健学習におけるアンケートや体力テストの結果など生かすことで、自分の体力に興味を持てるようにした。	B
地域連携	①学校運営協議会と連携し、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②地域の方と関わる機会や方法を工夫していく。地域の方と子どもたちの交流の機会となるようスマイルクレーン作戦、地域防災訓練を実施する。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら、子どもたちの興味を大切に学習を展開していく。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わり取り組んだりできるように教材研究を進める。	①学校運営協議会の方々に授業を参観していただいたりする中で、お声を学校づくりに反映させることができた。②スマイルクレーンや地域防災訓練を通して、学校全体で全校の子どもたちと地域の方と交流しながら活動を行うことができた。③生活科、総合的な学習の時間の校内研究を行うことを通じて、地域への愛着が持てる児童たちの育成を進めた。	A
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、子どもの思いを大切に児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。	①子どもたちが安心して相談できる関係づくりを目指し、子どもたちのSOSに対して、アンテナを高くし日頃の様子を見守ることで未然防止に努めた。②いじめに対しては積極的に認知し、組織として対応した。定期的に対応の仕方などをいじめ防止対策委員会と共有した。③教育相談を定期的に行い、子どもたちの困り感を早期に発見することができた。	B
人材育成・組織運営(働き方)	①年間授業時数の見直しに伴う週時数削減で職員の午後の時間の確保ができていく。その時間をより有効に使い、学年やブロックでのタブレット端末を用いた教材研究を計画的に進めるようにする。②校務分掌において、所属していない部署の仕事を可視化することで、少しでも多くの仕事を知ることができるようにする。常に複数人で仕事を進められるように組織的な働き方の形を定着させる。	①職員自身が時間の使い方を考え、有効活用できている。特に職員間での会話は多く、よりよい関係性が構築できている。ブロックを生かした人材育成も少しずつ浸透している。②持続可能な職場を意識し、誰がどの仕事に就いても仕事のイメージをもって臨めるよう継続していく。職員会議の際に、各部署での仕事状況を伝え合うことで共通理解を高める。	B
コミュニケーション能力	①なかよしタイム(たてわり活動)を通して他学年と関わる経験をすることで、コミュニケーション能力を育てる。②子ども主体で計画された総合の発表会など、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③幼保小では、毎年幼稚園との交流を通して、自立心を養う機会をもてるようにする。	①たてわり活動で、遊びや給食を中心とした関わり場の場を設定した。相手のことを考えて活動できる児童も増えてきている。日常生活でもよりよいコミュニケーションが取れるように、活動を継続していく。②生活や総合の学習を中心に、子どもたちの思いを生かした授業を目指し研究を進めてきた。学習したことを発表したり、人と関わったりすることが多くなり、自分の考えを進んで伝えようとする姿が見られた。	B
授業改善	①単元ごとに育成したい資質・能力のポイントを明確にし、授業を進める。振り返りにはタブレット端末を用いることで、フィードバックのスピードを上げる。同時に、獲得した知識や技能を次の活動につなげていけるように指導する。②重点研究で「自発的・主体的に行動できる子どもの育成」を掲げて取り組んでいる。子どもたちの得た経験をさらに生かすために、子どもたちの興味・関心を解決する学習を進め、授業に意欲的に取り組めるようにする。	①タブレット端末の有効利用により、よりスムーズな授業展開が行えている。子どもとのやりとりが円滑になることで、思いを込めた授業が行えている。②学習状況調査の意識調査でも意欲は見取れているので、重点研の総て身に付けた力などを他教科等でどのように活用しているのか教師側がもっと考えていく必要がある。	B
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して、組織的に児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。	①「こども手帳」に基づき、一貫性のある指導を行うことで児童が安心して過ごせる環境を整えた。各学年の生活の様子を定期的に振り返りながら、生活指導を行った。②YPアセスメントの結果をもとに支援検討会をもち、個や集団の課題に応じた支援を行った。③カウンセラーを講師に招き、戦略的にかわる勇気づけについての児童指導理解研修を行い、対応力を高めることができた。未然防止の観点から、学級経営の運営については若い教員を中心に学んでいく必要がある。	B
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方を考える。個別の教育支援計画や個別の指導計画の活用について共通理解を図る。②特別支援教室を有効に活用する。一人ひとりにあった支援や活用方法を学校、家庭、本人と相談しながら本人の思いを大切にしながら決定し、支援と指導を継続的に行う。③コンサルテーションや研修を実施し、教室の中でできる特別支援について高め、実践していく。	①特別支援教育委員会を中心としてアセスメントシートなどを活用しながら実態を丁寧に把握し、支援方法を検討してきた。個別の支援計画や指導計画の活用については改善の余地がある。②特別支援教室利用する児童一人ひとりにあった支援方法を組織的に検討し役割分担しながら支援をした。③コンサルテーションなどから学んだことを生かして、環境改善や授業改善について工夫した。	B
ブロック内評価後の気づき	室中ブロック内でたてわり活動や地域との関わりを大切にしながら活動することができていた。また、「人とのかわりを大切にしたい指導」をテーマに授業研究会を行うことで、各校がどの教科でも人と関わりながら学び合える授業を展開しようとする意識が高まっていることが分かった。相手意識をもって、言葉で説明することにより、今後、思考・判断・表現力の育成につながっていくのではないかと思う。それを小中でつなげて、6年間で大切に育てていきたい。来年度も同様のテーマで、より心の豊かな子どもをめざして指導していく。いじめ案件対応が多くなっている。未然に防ぐ対応や、子どものコミュニケーション能力不足が課題となっている。人との関わりを大切にしながら、コミュニケーション能力の強化をめざしていく必要がある。また、人材育成について校内の職員半分以上が初任校となっており、人材育成がままならない現状となっている。		
学校関係者評価	年間を通して地域の方に授業参観を公開し、意見・感想をいただいている。子どもたちが生き生きと発表している。掲示物が丁寧である。タブレットをよく活用している。など高評価をいただいた。また、登下校の見守り時に子どもたちから元気な挨拶をもらえる、との意見もあった。生活科や総合の授業などで地域の方と関わることも多く、公園の花植え活動や音遊び、ケアプラザとの交流、待従川の自然観察など、年間を通して地域の教育力を学習に生かすことができた。学校運営協議会やまちの懇話会を通して児童の様子や学校の課題がよく地域に伝わっていると同評価をいただいている。		
中期取組目標振り返り	重点取組分野における「地域連携」について特に取組を推進することができた。行事や授業参観日に合わせて実施した学校運営協議会では、直に子どもたちの様子に触れながら、学校や地域の話題を共有したり課題整理したりすることができた。また、別の重点取組分野「自発的・主体的に行動できる力」にも取り上げている重点研究の「生活科」や「総合的な学習の時間」等において、「まちなか」と繋がり関わりながら活動したり、問題解決したりすることができた。次年度に向けて、児童のコミュニケーション能力育成や教職員の人材育成等の取組をより一層充実させていきたい。また、特別支援教室の運営方針や内容について検討し、学習や登校等に不安がある児童が安心して学び、過ごせる場として整備していきたい。		

重点取組分野	令和 8 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
自発的・主体的に行動できる力	①子どもが獲得した知識を活用できるよう、知識の定着を目指す授業展開を行う。同時に、獲得した知識や技能を次の活動につなげていく年間計画を立てる。②昨年度の重点研究で「自発的・主体的に行動できる子どもの育成」を掲げて取り組んだ。子どもたちの得た経験をさらに生かすために、子どもたちの興味・関心をより高め、授業に意欲的に取り組めるようにする。		
豊かな心	①互いに認め合える温かい学級風土づくりを目指し、YPアセスメントや横浜プログラムの活用を図る。②命の大切さになれる学習を充実させることで、自分や周りの人を大切にしようとする気持ちを育む。③進んであいさつをすることや互いに認め合える関係づくりの取組を子ども主体で計画する。		
健やかな体	①体育の授業や運動委員会の児童の活動を通して、年間を通して様々な運動に親しむ環境を整え、子どもが主体的に体力向上を図れるようにする。②食育部を中心に、給食目標や給食週間を設定し、好き嫌いをなく食べることの習慣を身に付けたり、子どもが食の大切さ考えるための取組をしたりしながら実施する。③子どもがデータから自分や学校の状況を理解することで、主体的に健康な生活を実践できるようにする。		
地域連携	①学校運営協議会と連携し、地域・社会とつながる学校づくりを進める。②地域の方と関わる機会や方法を工夫していく。地域の方と子どもたちの交流の機会となるようスマイルクレーン作戦、地域防災訓練を実施する。③生活科や総合的な学習の時間では子どもの実態や願いを明らかにしながら、子どもたちの興味を大切に学習を展開していく。また、地域の「材」について、子どもたちが主体的に関わり取り組んだりできるように教材研究を進める。		
いじめへの対応	①児童・家庭・地域の実態を把握し、子どもの思いを大切に児童が安心して力を発揮できる集団を育てることで、いじめの未然防止に努める。②いじめ防止対策委員会を中心とした全職員による情報共有と、早期対応、確実な事後指導を組織的に行う。③アンケートや教育相談を定期的に行い、児童が相談しやすい環境を整える。		
人材育成・組織運営(働き方)	①年間授業時数の見直しに伴う週時数削減で職員の午後の時間の確保ができていく。その時間をより有効に使い、学年やブロックでのタブレット端末を用いた教材研究を計画的に進めるようにする。②校務分掌において、所属していない部署の仕事を可視化することで、少しでも多くの仕事を知ることができるようにする。常に複数人で仕事を進められるように組織的な働き方の形を定着させる。		
コミュニケーション能力	①なかよしタイム(たてわり活動)を通して他学年と関わる経験をすることで、コミュニケーション能力を育てる。②子ども主体で計画された総合の発表会など、様々な場面で自分の考えや学習したことを伝える活動を通して、自分の考えを効果的に伝える方法を学ぶ。③幼保小では、毎年幼稚園との交流を通して、自立心を養う機会をもてるようにする。		
授業改善	①単元ごとに育成したい資質・能力のポイントを明確にし、授業を進める。振り返りにはタブレット端末を用いることで、フィードバックのスピードを上げる。同時に、獲得した知識や技能を次の活動につなげていけるように指導する。②重点研究で「自発的・主体的に行動できる子どもの育成」を掲げて取り組んでいる。子どもたちの得た経験をさらに生かすために、子どもたちの興味・関心を解決する学習を進め、授業に意欲的に取り組めるようにする。		
児童生徒指導	①「こども手帳」の内容を中心に指導事項を共通理解し、一貫性と継続性のある生活指導を行うことで、児童が落ち着いて学校生活を送れるようにする。②YPなどを活用し、多角的な児童理解をもとに児童の自己肯定感を高めるとともに、児童が安心して力を発揮できる集団を育てる。③研修を通して発達支持的かつ未然防止教育に重点をおき、組織的に児童の課題に適切な指導・支援を行う力を高める。		
特別支援教育	①特別支援教育委員会を中心に、支援を要する児童の実態を丁寧に把握し、個に応じた支援の在り方を考える。個別の教育支援計画や個別の指導計画の活用について共通理解を図る。②特別支援教室を有効に活用する。一人ひとりにあった支援や活用方法を学校、家庭、本人と相談しながら本人の思いを大切にしながら決定し、支援と指導を継続的に行う。③コンサルテーションや研修を実施し、教室の中でできる特別支援について高め、実践していく。		
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			

重点取組分野	令和 9 年度		総括
	具体的取組	自己評価結果	
自発的・主体的に行動できる力			
豊かな心			
健やかな体			
地域連携			
いじめへの対応			
人材育成・組織運営(働き方)			
コミュニケーション能力			
授業改善			
児童生徒指導			
特別支援教育			
ブロック内評価後の気づき			
学校関係者評価			
中期取組目標振り返り			